

Vol. 29 No.1
2011.5.1

R E I M E I

黎明

鹿児島県歴史資料センター
黎明館だより

Kagoshima Prefectural Museum of Culture Reimeikan

黎明館企画展

調^ず所^{しょ}広^{ひろ}郷^{さと}とその時代

平成23年5月31日(火)～8月21日(日)



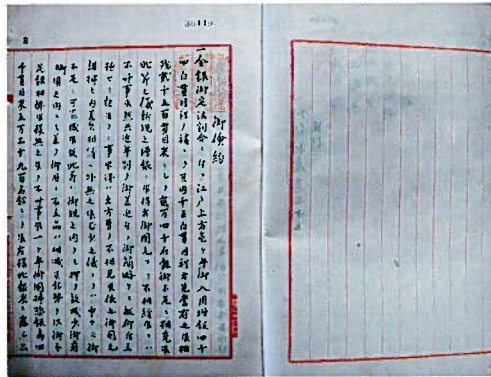
(中央)調所広郷肖像(尚古集成館保管) (左下)『鹿児島城下絵図屏風』より琉球楫船(個人蔵) (右下)島津重豪朱印状

調所笑左衛門広郷(1776～1848)は鹿児島城下の下級武士の家に生まれました。幼くして調所家の養子となり、最初は島津重豪に、その後は重豪の孫・斉興に茶道で仕え、のちに斉興の側近となります。当時の薩摩藩は莫大な負債を抱えており、財政再建が最大の課題でした。調所は重豪から財政改革主任に文政11年(1828)任命されます。調所は財政改革はもとより、藩政全般の改革に取り組みます。調所の改革の成果によって、薩摩藩は集成館事業や、幕末から維新期の活躍の基礎を築くことができたとも言えます。

調所広郷が行った天保の改革の様々な面に光を当てるとともに、調所とその時代の実像を紹介します。

第1章 薩摩藩の財政危機

薩摩藩は成立当初から財政赤字を抱えていました。その中でも特に大きな負担が、幕府の命による御手伝普請と、参勤交代の経費でした。さらに8代藩主島津重豪が開化政策を進めた結果、負債はさらに膨らむことになりました。



『列朝制度』記載の俸約令（鹿児島県立図書館蔵）

の身分を与えたり、商業上の特権を与えるなどで報いました。

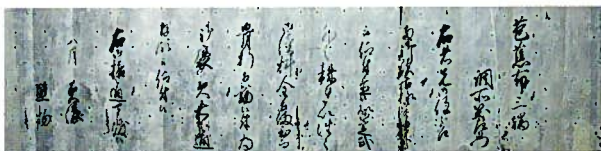
調所の殖産興業政策は、当時の経世思想家の佐藤信淵の影響を受けていました。その柱は特産品の増産と専売制の強化でした。そのため薩摩藩では薩摩焼などの産業を保護する政策を採り、奄美特産の砂糖や、本土での樫蠟や樟脳等の専売を強化しました。



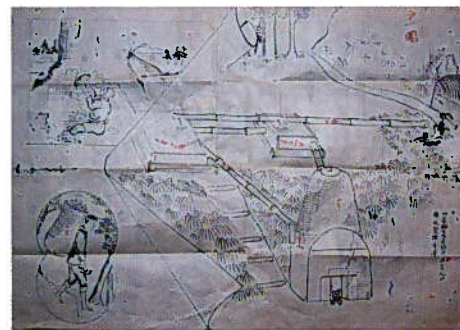
『南島雑話』より砂糖代米の図（鹿児島大学附属図書館蔵）

第2章 調所広郷の登場

調所の財政改革主任への就任までの経歴や、彼の家族などの人間関係について紹介します。



定式外唐物貿易成功につき拝領品書



樟脳製造の図

第3章 改革の展開

調所による改革の柱は、財政再建と殖産興業でした。調所は藩債を「元本のみ二百五十年賦払い」として整理します。この返済は廃藩置県まで行われていました。



割渡金銀書付（古借銀刻渡書付）

また藩に貸付をしていた商人に対しては、武士

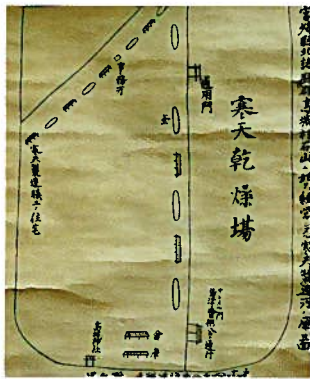
日置市の苗代川は薩摩焼の陶工が集住していました。調所は弘化3年（1846）に南京皿山窯の開窯で染付白磁の製造を始め、藩外への移出に力を入れました。調所の死後、苗代川の人々は調所の招魂墓を作りました。



調所広郷の招魂墓（日置市美山）

調所は商人を保護し、その利益の中から藩へ献金をさせました。その代表的な人物が指宿の浜崎

太平洋です。奄美の砂糖や本土の年貢米などを大坂へ運搬させるとともに、その資金で寒天製造も行わせました。



寒天乾燥場掛軸

調所は藩財政再建のために琉球口貿易振興も図ります。藩は島津重豪の頃から琉球口貿易による増収を図り、調所はそれをさらに拡大します。琉球を通して入手した中国の産物を、幕府の許可を得た長崎だけでなく、各地に販売しました。



新鐫 長崎之図

調所が改革を行った時代は欧米が日本近海に進出してきた時期でもありました。藩政改革では無駄を省く一方で、藩内で軍事工場の設置や西洋式軍隊の演習を行っています。



福山牧操練図（個人蔵）

調所の改革は財政のみならず、殖産興業や農政、軍事にまで及び、薩摩藩は一躍国内で最も近代的

な藩になりました。その一方でその財源は人々の負担によるものでもありました。特に奄美は砂糖の専売強化により、重い負担を強いられました。この奄美の負担は調所の死後、島津斉彬が藩主になるとさらに強化されました。



『南島雑話』より大島凶年の図（鹿児島大学附属図書館蔵）

第4章 改革ののちに

嘉永元年（1848）に調所は江戸で急死します。自殺と考えられ、その原因は琉球口貿易を幕府に追及されたためといわれます。調所の死後、調所家は家格引下げ、改姓などの処罰を受けます。

しかし西南戦争後、調所の政策が再評価されます。それは戦後復興に調所の殖産興業を活かそうとの判断でした。調所再評価の動きを紹介します。



調所の側近・海老原による『海老原清熙履歴概略』（鹿児島県立図書館蔵）

関連行事

学芸講座	（展示解説講座）
テーマ	「調所広郷とその時代」
日時	7月2日（土）13：30～15：00
講師	学芸専門員 新福大健
会場	黎明館3階講座室

※講座は無料、申し込みは必要ありません。

※講座終了後、展示場で解説を行います。その際は常設展示団体入場料が必要です。

インフォメーション黎明館

平成23年度の主な事業について

平成23年度、黎明館が実施する主な事業について、その概要をお知らせします。

1 自主企画事業

(1) 黎明館企画特別展

「大阪がやってきた!～古代から近代
鹿児島とのつながり～」

(9/30～11/3, 第2特別展示室)

平成23年3月12日九州新幹線が全線開業しました。山陽新幹線との直通運行が始まり、鹿児島中央から新大阪まで4時間弱で結ばれることになり、これまで以上に関西圏と鹿児島が身近な存在となります。

そこで、これを記念し大阪にある鹿児島と関連のある様々な歴史資料を中心に展示し、文化面の視点から、鹿児島と大阪が歴史的にも深いつながりをもった存在であることを紹介します。

(2) 教育普及

ア 講演会(午後1時半から講堂)

本年度は民俗・歴史の分野に関する講演会を実施します。

○7月23日(土)

「中国貴州省の民俗と日本文化(仮)」

國學院大學教授 小川 直之氏

○10月22日(土)

「豊臣政権下の島津領国(仮)」

九州大学大学院教授 中野 等 氏

※1月または2月に、東京大学史料編纂所教授の講演が予定されています。

イ ふるさと歴史講座

鹿児島の歴史と文化を考える講座です。今回は、歴史の分野に関する講座となります。

○7月9日(土)、10日(日)

(午後1時30分から講座室)

「島津氏と朝鮮の役(仮)」

鹿児島国際大学准教授 太田 秀春氏

ウ 古文書講座(午後1時30分から講座室)

黎明館学芸専門員による古文書解説講座と県内有数の歴史研究者による歴史・古文書の魅力に触れる講座を開催します。

○古文書講座Ⅰ 5/21～6/25(土)6回

古文書解説を中心に、定員20人程度

○古文書講座Ⅱ 11/5～12/17(土)7回

古文書と歴史の魅力を語る。定員50人程度

エ 学習支援講座 エンジョイ黎明館

○「常設展示の世界—学習支援のための鹿児島の歴史と文化」(7/26～27)

学校の教職員を対象として、学習の場における黎明館展示の活用を図ります。

○「常設展示の世界—語り継ごう鹿児島の歴史と文化—」

黎明館展示解説員が常設展示を時間をかけ、丁寧に解説します。何回でも受講できます。(毎月第2土曜日、8月のみは第3土曜日、午前10時から12時、黎明館常設展示場)

○「学芸講座」

学芸専門員が調査・研究したそれぞれの担当分野に関して講座を開催します。

7/2, 7/30, 9/3, 9/10, 10/1, 10/8, 10/29, 1/14, 2/4, 3/10, 3/31

(午後1時半から3時、黎明館3階講座室)

2 常設展示運営事業

(1) 企画展(3階・企画展示室)

黎明館が収蔵する15万点以上の資料の中から、常設展で見る機会の少ない収蔵資料を中心に、年4回の企画展を開催します。

ア「調所広郷とその時代」(5/31～8/21)

イ「鹿児島の修験(仮)」(8/30～11/13)

ウ「田尻稻次郎の生涯(仮)」(11/22～1/9)

エ「縄文人のこころと祈り(仮)」(1/17～5/6)

(2) 体験学習

郷土の玩具、楽器、機織に手を触れ、鎧や兜を着用する等の体験ができます。また、もの作り等の体験講座を年5回開催します。

ア 屋内での活動

○6月25日(土)和装本づくりに挑戦しよう

○8月6日(土)薩摩焼をつくろう

○12月24日(土)正月を楽しもう

イ 屋外での活動

○11月27日(日)絵地図でめぐる鹿児島城下

○3月17日(土)学芸員と探る鹿児島城周辺

3 資料収集整備事業

(1) 資料調査収集協力員

県内各地に21人の資料調査収集協力員を委嘱し、展示・収蔵する資料の情報を得る

(2) 寄贈・寄託・購入による資料の受入れ

(3) 資料の保存のためのくん蒸

(4) 黎明館調査研究報告第24集の刊行

4 資料情報提供システム整備事業

来館者用情報提供システムの保守点検、管理を行います。

5 県史料編さん事業

(1) 刊行

「旧記雑録拾遺 記録所史料一」

「名越時敏史料二」

(2) 編集

「旧記雑録拾遺 記録所史料二」

「名越時敏史料三」

※日程は都合により変更になることがあります。

常設展示のみどころ40

こんどうぼさつりゅうぞう

吹上町田尻の金銅菩薩立像

日置市吹上町田尻御観音講 蔵
鹿児島県指定文化財

この金銅菩薩立像は、唇の両端がかすかに上がったアルカイック・スマイル、アーモンド形^{みだ}の目、衣の襞が左右対称となっている、緩やかなS字形の側面観など、飛鳥時代の仏像の特徴を示す。また、冠^{かんむり}から足下の蓮華^{れんげ}の一部まで16.3cmあり、所々に鍍金^{めっき}が残っていることから全体に金色であったことが分かる。



吹上町田尻の金銅菩薩立像

後頭部には光背を支える穴があり、冠の両脇には垂れ飾りの孔がみられる。さらに、材質や大きさは異なるものの、法隆寺夢殿の救世観音像と比較すると、宝珠^{ほうしゅ}を持つ手がわずかに下がっているだけで、側面から見るとほぼ相似形である。この様なことから、7世紀半ばの制作であると考えられている。

この様に古い仏像は、九州では熊本県山鹿市の鞠智城跡^{きくちじょう}から出土した百済系菩薩立像や福岡県太宰府市観世音寺蔵の金銅如来立像など少数で大変貴重なものである。日置市吹上町田尻には、少なくとも享保2（1717）年には伝わっていたものであることが、縁起文で確認でき今日まで大切に守られてきたものである。金銅菩薩立像が制作されてから、どのような経緯で吹上町田尻にたどり着いたか不明である。日本書紀によれば、大隅・阿多に僧侶を派遣し仏教を伝えたのは、持統6（692）年であり、もしこの時金銅菩薩立像が伝えられたとしても、年代的に矛盾はない。吹上浜周辺は古墳の分布域でなく、古代の様相も明らかでない。もし、金銅菩薩立像が早い段階でこの地に安置されていたとすれば、南九州における仏教文化の伝

播や、隼人と呼ばれる人たちが朝貢する経緯などを考える上で、大変興味深い資料である。

黎明館に寄託されたことを契機に、九州国立博物館で金銅菩薩立像の文化財用大型X線CTスキャン装置および精密三次元計測装置による調査を実施した。これらの機器は非破壊・非接触で高速・精密に測定でき、外面ばかりでなく内部の断面や構造を調べることができる。調査の結果、金銅



触れて観察できる金銅菩薩立像複製品

菩薩立像は内部まで青銅が流し込まれており、気泡の位置から頭部を下にしてつくられたことが分かった。内部の構造を調べることによって、制作工程や脆弱な場所が把握でき、技術の解明や取扱い方法にも寄与する。また、計測したデータを三次元プリンターで復元すると、相似形の金銅菩薩立像ができ、ガラス越しでは分からない部位の状況を手にとって観察することができる。

今回二体の複製をつくり、一体は拡大した仏像に鍍金が残っている部分を着色し、見えにくい箇所の状態を示した。もう一体は、法隆寺夢殿の救世観音像を基に台座と光背を想定復元し、川辺仏壇の伝統技術によって金箔仕上げとした。これによって、金銅菩薩立像が制作された当時の荘厳さが偲ばれる。



想定復元された金銅菩薩立像

5月26日（日）までは企画展「収蔵庫が語る鹿児島県の歴史」で展示し、その後常設展示場に移す予定である。（前主任学芸専門員 東和幸）

調 査 研 究 ノ ー ト

二つ家 ～日本列島とラオスの比較～

この三月、県内唯一の屋根葺き集団である「知覧町茅葺技術保存会」による、葺き替えにかかっていた屋外展示場の「樋の間^{てまふたえ}二つ家」の萱屋根が完成した（本誌8ページ写真参照）。この民家は、居住棟と炊事棟の二棟が接する軒先に雨垂れ防ぎの樋を掛け、その下を板の間にし、一つの家として利用する民家である。

この形の民家は、熊本県と福岡県境地域や四国、東海（天竜川下流域）、房総（太平洋岸沿い）、八丈島等に分布し、鹿児島から南西諸島は最も豊かに分布をする地域であり、極めて限定的で飛び石的な様相を示すのは、興味深い事実である。しかも、鹿児島から南西諸島の地域内においても、その分布は斑模様を示している。その出自として東南アジアや太平洋地域の、別棟をいくつも建てる多棟式民家との関連が指摘されている。二つ家の研究をライフワークの一つとした小野重朗は、その分布が旧薩摩藩全域に見られるものの、川内川中流域、霧島山麓地域、知覧・川辺の三つの濃厚地帯を除けば、1町村に1、2戸という程度の分布で、4間取りのオモテとヘヤと土間を持つをナカエからなる一つ棟の民家がほとんどであると指摘した上で、その変遷過程として、二つ家から一つ棟の民家へという系譜を提示している。小野の模式図をどう理解すべきであろうか。

筆者は、1996年以来16年、17回にわたって、東南アジアのラオス北部のタイ、ミャンマー、中国雲南省双西版纳、ヴェトナム北部に接する地域を継続的に歩いてきた。第1回目（1996年3月）、シェンクアン県ボンサヴァン市センリ村（タイプアン族）に入ると、棟を直角に接して、その間に雨樋が渡され、その下が板の間で繋がれた家が、目に飛び込んできた。「どこかで見た風景。鹿児島の二つ家だ」と素直に感動しカメラのシャッターを切った。聞くと、右の大きな家が居住棟で、左の小さな家が炊事棟であるという。2メートルの高床の高さ別にすれば、紛れもない鹿児島の二つ家で

あった（写真）。第2回目（1997年1月）、メコン河左岸のウドムサイ県パクベン郡ルントン村（ラオ族）で見た二つ家も同様で、床は炊事棟より居住棟が15センチほど高くなっている点まで一致していた。



一方で、第3回目（1998年1月）に見たベトナム国境のボンサリー県マイ郡ホック村（モン族）や中国雲南省双西版纳国境のブンタイ郡アヤ村（モン族）の一つ家は、高床の構造を持たない土間形式で、囲炉裏を屋内に内包する形式であった。

ところが、同じ調査で見た同県同郡ナムカム村（タイルー族）の家屋は、高床式の一つ家と二つ家が混在していたのである。一つ家は屋内に囲炉裏を含めた炊事部を持つ形式であり、附属の露台を伴っていた。それに対して、二つ家は、大きな切り妻の居住部と小さな炊事棟とが、樋で連結されたものであった。「どちらがタイルー族本来の形か」という筆者の問いに、一つ家が本来の形で、二つ家は炊事部が一つの棟として付け加えられた新しいものである、という答えが返ってきた。つまり、一つ家から二つ家へという変遷が確認できる。同様の変遷は、ルアンパバーン県ナムバーク郡コックナン村（タイルー族）やルアンパバーン市ティンパー村（カム族）でも確認できている。

日本列島や鹿児島における二つ家の限定的で、飛び石的、斑雪状の分布を、多棟式から変遷した二つ家が、斑雪のように各地に消え残ったとするのか。それとも多棟式と二つ家と一つ家は、一つの系譜につながる文化ではなく、別々の文化として伝播し存在したとするか、読み直しせざるを得ない。そのためにも「二つ家」を元々とする民族の確定が迫られている。それは、日本列島の文化の多様性を明らかにしていくための課題であり、二つ家もまたそのための重要な鹿児島の民俗文化の一つなのである。（学芸専門員 川野和昭）

「島津家久公上洛の旅」

東京大学史料編纂所教授 榎原 雅治 氏

「島津家久旅日記」という史料について紹介したい。この家久は初代藩主ではなく、その叔父で義久・義弘四兄弟の末弟「家久」のことである。当日記には諸本あるが、島津家文書中に原本に近い時代の良本が見つかり、それを用いて話を進める。旅の年代である天正3年（1575）は、信長にとって尾張・三河の政権から全国政権になりつつある時期、島津氏にとっては薩隅を越えた九州の大大名へ成長する時期に当たる。

家久は居所の串木野を出発し、途中諸所に立ち寄り京都に入る。滞京中は主に連歌師里村紹巴の許に身を寄せ、行動を共にしている。入京のその日には、河内高屋城攻めを終え帰京した信長の行列に遭遇し、華やかな軍勢と馬上で居眠りする信長の姿を見ている。琵琶湖見物の際には明智光秀に様々な接待を受けている。

さて、滞京中家久はどのように日々を過ごしたのか。有名な神社仏閣を訪れるほか、百人一首、源氏物語、平家物語等、古典ゆかりの地を巡っている。ただ訪れるだけでなく自らの文芸活動も行っている。里村紹巴、近衛植家の弟大覚寺義俊、飛鳥井雅教等、公家や著名な連歌師等と連歌を楽しんでいる。また飛鳥井家では蹴鞠を楽しんでおり、他の記述と併せて考えると、それを評価する目も持っていたことがわかる。家久は大変な戦功を挙げた武将であるが、このように見ていくと実に公家的な行動が目立つ。

ここで二つの疑問が生じる。一つは家久がどのようにして公家的教養を身に付けたのかということ。もう一つは里村紹巴がなぜ家久をこのようにもてなしたのかということである。

一点目については、島津家と近衛家の関係を指摘できる。島津氏は元々近衛家の家臣の出身であり、両家は鎌倉時代から深い交流があった。戦国期には両家の使者や贈答品が薩摩と京都を行き交っている。史料編纂所蔵の島津家伝来の平家物語は近衛信尹や飛鳥井雅賢が書いた物だと見極められている。家久より多少時期は下るものの、近衛



家や飛鳥井家の当主が筆写したものが薩摩に伝えられた事実を見ると京都の公家社会と島津氏の交流の深さがわかる。さらに注目すべきは樺山善久という人物である。樺山家は島津氏の分家筋にあたり、善久はその八代目当主として数々の軍功を挙げている。その正室は貴久の姉であり、娘は家久に嫁いでいるため、家久にとっては伯母の夫・舅にあたる。善久は天文20年（1551）に上洛し、滞京中に公家を中心とした歌人達と交流して里村紹巴とも接点を持った。また後には関白近衛植家から古今伝授を受けるなど、古典についての豊富な知識を持った人物であった。善久の祖父・子も同様に公家文化と深い接点を持っていたことも確認できる。樺山家に蓄積された公家文化、あるいは古典の教養が家久に継承されたと考えられる。

さて、帰国の道中について紹介する。家久は山陰道経由で帰国しているが、山陰道を歩いた中世の旅行記は他に例が無く、ここに面白い事実が記されている。石見銀山を過ぎる頃から、家久一行は多数の薩摩の人と出会っている。なぜ多くの薩摩人が石見に来ていたのか。16世紀後半、中国の需要増大により、世界の銀は中国に流れていた。その世界的産地が石見銀山であった。銀は石見→薩摩→琉球→ルソン→中国のルートで運ばれ、石見から琉球までの流通を薩摩の商人が担っていたことが近年の研究で明らかになっている。家久一行はまさにそれらの人々と出会ったのであり、世界的経済の現場に居合わせたといえる。

家久は7月20日頃に串木野に帰着するが、その頃里村紹巴から樺山善久に一通の書状が届いている。そこには滞京中家久は娘の父として心配しなければならないような行動はとっていないという意味の報告がある。紹巴はただの親切心からだけではなく、旧知の善久に頼まれて、その輩の行動を監視していたのではないか。これが先ほどのもう一つの疑問の答えである。

（文責 調査史料室）

黎明館の催し物(平成23年5月～7月)

■黎明館企画展〔常設展示観覧料〕3階企画展示室

一般300円 高大生190円 小中生120円

「収蔵庫が語る鹿児島県の歴史」

開催中～ 5月22日(日)

「調所広郷とその時代」

5月31日(火)～8月21日(日)

■学芸講座〔無料〕2階講座室

「調所広郷とその時代」

7月2日(土) 13:30～15:00

講師 新福 大健 学芸専門員

「ある桶職人の暮らし(仮)」

7月30日(土) 13:30～15:00

講師 川野 和昭 学芸専門員

■講演会〔無料〕2階講堂

「中国貴州省の民俗と日本文化(仮)」

7月23日(土) 13:30～15:00

講師 國學院大学文学部教授 小川 直之 氏

■ふるさと歴史講座〔無料・申込制〕3階講座室

「島津義弘からみた朝鮮役(仮)」

7月9日(土)・10日(日) 13:30～15:00

講師 鹿児島国際大学准教授 太田 秀春 氏

■楽しい体験講座〔無料・申込制〕

「和装本づくりに挑戦しよう」

6月25日(土) 13:00～16:00

講師 黎明館職員

「薩摩焼をつくろう」対象 小学4年生から中学生

8月6日(土) 13:00～16:00

講師 琴鳴窯 四元 誠 氏

■学習支援講座 エンジョイ黎明館

〔常設展示団体観覧料・申込制〕

「語り継ごう鹿児島県の歴史と文化」

毎月第2土曜日開催

(但し、8月は第3土曜日) 10:00～12:00

休 館 日

(平成23年5月～7月)

5/9. 16. 23. 25. 30

6/6. 13. 20. 27

7/4. 11. 19. 25

黎明館 ある日 ある時



このたび、屋外展示の「樋の間二つ家」は、県内唯一の屋根葺き集団「知覧町茅葺技術保存会」による屋根葺き替えが終わりました。同時に畳も新調されました。真新しい茅屋根とともに、是非ご覧下さい。

人事異動(平成23年4月1日付)

- 【転 出】主幹兼総務係長
木場 純子(女性相談センター主幹兼相談係長へ)
主任学芸専門員兼企画資料係長
東 和幸(埋蔵文化財センター主任文化財主事
兼調査第一課第一係長兼南の縄文室長補佐へ)
学芸専門員
肥後 盛秋(鹿児島市立鹿児島女子高校教諭へ)
- 【転 入】主任学芸専門員兼学芸調査係長
中原 一成(埋蔵文化財センター文化財主事から)
学芸専門員
切原 勇人(鹿児島市立鹿児島女子高校教諭から)
総務課主査
坂下 登(再任用)
- 【館内異動】総務課長補佐兼総務係長
中村 和彦(総務課長補佐から)
主任学芸専門員兼企画資料係長
栗林 文夫(主任学芸専門員兼学芸調査係長から)

期 間	黎明館以外の団体主催の催し物	観覧料	お問い合わせ先(敬称略)
開催中～5/5(木)	第1回 鹿児島白日会展	有 料	池川 直 099(347)1580
開催中～5/5(木)	九州新幹線全線開業記念 現代陶芸薩長展 in 鹿児島	有 料	廣田 実雪 099(248)1227
5/1(日)～5/4(水)	鹿児島モデルズコンベンション2011	無 料	鈴之原 和久 0995(66)3848
5/15(日)～5/22(日)	第58回 県美展	有 料	県美術協会事務局 099(223)0758
5/26(木)～6/5(日)	日展鹿児島会20周年記念展	有 料	日展鹿児島会事務局 090(3076)2869
6/8(水)～6/12(日)	三澤パッチワークスクエア作品展	無 料	児玉美貴子 0995(43)8397
6/17(金)～6/26(日)	南日本女流美術展	有 料	南日本新聞社事業部 099(813)5052
7/1(金)～7/3(日)	第39回 鹿児島県学生書道連盟展	無 料	古賀ひかり 099(248)2474
7/7(木)～7/10(日)	第49回 南日本七夕書道展	無 料	南日本書道会 099(223)5226
7/16(土)～7/24(日)	第20回 MBCハンドクラフト展	有 料	MBC学園 099(225)0251
7/16(土)～8/21(日)	南日本新聞・夏の特別企画展 大恐竜展2011	有 料	南日本新聞社事業部 099(813)5052
7/29(金)～9/3(土)	オルメカからマヤへ 古代メキシコ文明展(仮)	有 料	MBC南日本放送 099(254)7112

※掲載内容は5月1日現在のものです。催し物の内容・日程等は、変更になる場合もございます。

黎明

Vol.29.No.1
(通算111号)

発行年月日 平成23年5月1日

編集・発行 鹿児島県歴史資料センター黎明館

所 在 地 〒892-0853 鹿児島市城山町7番2号

Tel(099)222-5100(代表) Fax(099)222-5143

ホームページアドレス <http://www.pref.kagoshima.jp/reimeikan/>